

子どもが創る表現空間を探る 2

— 5歳児が創ったスペースにおける描画の様相 —

奥 美佐子

(名古屋柳城短期大学)

1 問題の所在

1995年12月、筆者は保育園の5歳児を対象にした造形保育を試みた。それは、これから絵の具で描く場を幼児の手で、まず立体(ダンボール箱)と平面(模造紙)の素材で構成することから始めようとしたものであった。ここでの問題は、幼児が描画を目的とした場を上記の素材で空間構成し得るかという点である。5歳児は広域の空間全域を把握した上で描画に必要な場を構成することはできなかったが、上記の素材を用いて、自然発生的にいくつかの場を創った。この場合は図1・A～Dが示すように空間構成ではなく、ものによって構築された個別の場の併存である。また、導入部で投げ掛けた描くという目的と

描画のイメージは、場の構築時にはほとんど考慮されなかったと考えられる。

本稿では、幼児自ら創った場と表現行為に何らかの関連があるのか、またこの場が描画表現の内容や展開に意味をもつのかが問題となる。場の構築後スタートした描画のプロセスからこれらの問題を視点に据えて分析・考察したい。

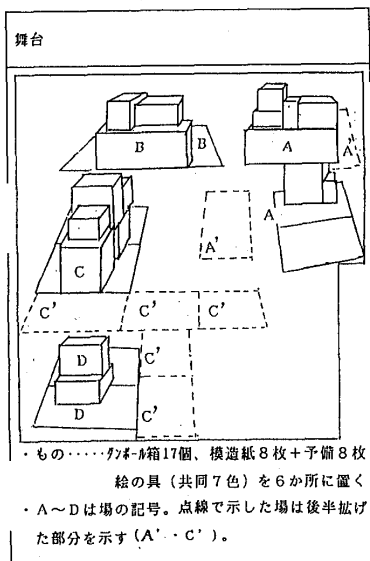


図1 5歳児が創った場

2. 方法

上記の保育は1995年12月25日、京都市内私立K保育園で実施した。在籍する5歳児27名中当日出席した17名(男児10名、女児7名)の描画行動を追う。A～Dの場への幼児の関わり方と描画の展開を写真及びVTRに撮り、その資料の読み取り等を通じて問題解決にあたる。

3. 描画のプロセスからの考察

(1) 場の視点から

表1 幼児の表現の場の推移 (1995.12.25)

被験児 記号	性別	年齢	構築に関 わった場	表現の場(A～D)の推移		
				スタート 11:02	紙を貼る 11:35~40	フィニッシュ 12:10
a	男	6.8	C	C(箱のスタート)	C'	C'
c	女	6.7	B	B(箱のスタート)	B	B
d	女	6.6	C	C(箱のスタート)	C'	C'
f	女	6.4	B	B(箱のスタート)	B	B
g	男	6.4	A	A(紙のスタート)	A'	A'
i	女	6.3	B	B(箱のスタート)	B	B
j	男	6.3	A・C	A(紙のスタート)	A(箱)	A(箱)
l	男	6.0	C	C(箱のスタート)	C'	C'
o	男	6.8	C	C(箱のスタート)	C(箱)	C(箱)
r	男	6.5	C	C(箱のスタート)	C'	C'
s	男	6.5	D	D(紙のスタート)	D(紙)	D(紙)
u	女	6.2	C	C(箱のスタート)	C'	C'
w	男	6.1	A	A(紙のスタート)	A'	A'
x	男	6.0	A	A(紙のスタート)	A'	A'
z	男	5.9	B	B(箱のスタート)	B	B
ア	男	6.6	A	A(紙のスタート)	A'	A'
イ	女	5.9	C	C(箱のスタート)	C'	C'

・この調査で利用した被験児記号a～zは、1993年度の調査(この調査の被験児が3歳児であったとき)の被験児と対象が同じであるため、同一の幼児にはそのまま使用した。被験児記号a～zの抜けた記号は、転園、もしくは当日欠席した幼児である。被験児記号ア～イは、1994年度以降入園した幼児を示す。

表2 子どもが活動した場

場 A～D	各場で活動した幼児	
	場の構成	描画
A(A')	g, j, w, x, ア	g, j, w, x, ア
B	c, f, i, z	c, f, i, z
C(C')	a, d, j, l, o, r, u, イ	a, d, l, o, r, u, イ
D	s, (j)	s(j)

・表2中jに付したアンダーラインは強調のため、()はその場へのワンポイントの参加を表す。

幼児の描画行動を支持体である表現空間(ここではA～Dの場)のどこへ描いたかについて、描画のスタートからフィニッシュへのプロセスを分析した。表1は17名を個別に追った結果を、表2はA～Dの場に関わった幼児群を示したものである。

表1、2から以下のことが読み取れる。

j児以外の幼児は自分が構築に関わった場を基地に

した。基地というより、むしろここが自分の場だと自分で決めたかのようにその場に拘って、自分たちが運んだ紙と積んだ箱に描いた。

活動の途中でAとCの場で描いていた幼児は、描画の場がなくなったと判断して模造紙をプラスした。それらはA、Cの場に連続して置かれ（図1、A' C'）、A→A' C→C'へと幼児は最初から活動していた場の増設部へ表現を拡張した。特にC'はDの方へと拡張し、最終的に形状としてはDと接続したのであるがC'で描画を続行した子どもたちはDの場には描かず、僅かに絵の具の貸し借りの交流があったのみで、Dは一人s児の場であった。Aではj児、Cではo児が増設部分に行かずj児はAの箱、o児はCの箱の部分に活動のフィニッシュまで描画を続けた。

場の構成時からj児はA C Dと関わりをもった。しかし、活動を通して見ると、基本的にはAに居るときき他の場に関わっている。j児はAを基地としており、彼の場はAであったと考えられる。

共同製作の概念をもたない活動であるにもかかわらず、子どもは自分で創った場で終始描き続けた。幼児は表現の場を移動しなかったのである。

（2）描画の視点から

描画の方法としては、幼児はA～Dにおおむね線で

描き、画面を塗りつぶす行為はない。

描画の内容は表3に示した。描画のプロセスを辿ると、Aではクリスマスプレゼントにもらったもの→好きなもの、描けるもの（象、カメ）へ、Bでは場をトラックに見立てたことからナンバープレート、ライト等→クリスマスに関連した

もの（トラックに載せた）→好きなものへ、Cはクリスマスプレゼント（少数）、描けるもの（象、チョウチョ等）→好きなもの→記号的なもの（丸、星）へ、Dは終始クリスマスプレゼントでもらったゲームの展開であった。

箱と紙で場を創ってクリスマスプレゼントを描くという当初の目的とイメージは、描画の初期段階で達成された。Aは中期以降、Cは初期から平行して異なった内容の描画が出現した。変化した描画の内容で、好きな絵と共にこれまでの保育で経験した絵画、象・チョウチョが頻出したのが興味深い。A、Cでは幼児の表現は描く場の探索とともに展開したと考えられる。Bでは場をトラックに見立て、場に意味をもたせたことから、クリスマスプレゼントをそこに載せるというストーリーを子どもが創った結果、描画内容が比較的長期に渡って継続したのであろう。Dにおける描画内容の継続は一人の幼児による表現であったことがその理由である。Dの場のs児は3歳時期の調査の折しも活動は単独であった。

4. 場と表現の連関

本研究を通じて明らかになったことは、

- ①幼児は表現の場を自分で創ったとき、その場で最後まで表現を続ける。
- ②描画内容は、場への見立てなどによる意味付けの有無によって展開が変わる。有る場合はストーリー展開から描画が変わり、無い場合は場への興味や個々の幼児の思いから描画が展開する。
- ③当初のイメージ以外に出現するフォルムは、自分が描きたいもの・描けるものに集約される。特に、保育で経験したものの出現の度合いが高い。

以上3点である。①は保育者が創った空間（前稿図3）での幼児の定着率46%と比較し、被験児の年齢差を考慮してなお顕著であった。幼児自身が場を創る意義を、場への所属意識や仲間意識の発生をここに加味して評価する必要があるだろう。しかし、場の構成を子どもがすることがベストだと言うことではない。保育の中で造形活動の空間構成を考えると、子どもが創る空間と保育者が創る空間では場の意味が異なる。子どもはそこで質の違った経験をするのだという認識がある。また、場の読み取り方で描画内容が変わることは活動のきっかけを多様な視点でもつ必要があることを示唆する。場と表現の関連は深い。これらの結果を踏まえて多様な表現に耐える得る環境、換言すれば柔軟な表現環境の創造が課題であろう。

表3 A～Dの場の描画内容

場の名称	場の構成材料と特徴	描画の内容
A	箱7、紙2で構成した最も大きくて背が高く、不安定だが特徴のある場。	車、おもちゃ、ゲーム、大砲等、クリスマスプレゼントを描く。時間経過と共に象、カメ、迷路などの好きな絵を描き続けた。
B	箱3、紙2でコンパクトな場を創る。完成後トラックに見立てる。	箱の前後にナンバープレート、前面にライト等、見立てたトラックに関係あるものを描く。人形、いちご、車、ケーキ等、クリスマスにちなんだものが多数描かれた。箱の側面の塗り分けが見られた。
C	箱5、紙2で、ランダムに箱を重ねた横長の場。	象多数、チョウチョ、うさぎ、車。紙をプラスした後と同様の内容の描画が続く。星、丸、塗り込みあり。個々に好きなものを描いている様子。
D	箱2、紙2。箱1、紙2で一人の幼児が創ったところへ、別の場の幼児が箱1を乗せてできた場。	紙の場にゲームを描き続ける。お城や怪獣を矢印でつないで最後まで一人で描く。箱の描いた窓、三角のみj児のもの。